

Deaf Sports

&

Deaflympics

ろう者スポーツとデフリンピック

Presented

to

The International Olympic

Committee

国際オリンピック委員会提出レポート

Prepared by

Dr. Donalda K. Ammons

ドナルダ・アモンズ博士

国際ろうスポーツ委員会 会長

2008年9月

President

International Committee of Sports for the Deaf

September 2008

目次

I. デフリンピック	
a. はじめに	3
b. 歴史と関連データ	3
c. ICSD の組織と構成	6
II. IOC・IPC 等、および諸団体との関係について	
a. IOC	9
b. IPC	9
c. ISF	10
d. 転機となった出来事と課題	11
III. 他の障害者スポーツとの問題・その他	
a. 障害者スポーツ	14
b. 各国政府と各国オリンピック委員会	15
c. デフリンピックのトレードマーク	17
IV. IOC	
a. IOC の使命と役割	17
b. IOC のマーケティング活動	18
c. オリンピックとスポーツ運動の自治	18
V. 国際連合条約	
a. 国連障害者の権利条約第 30 条 5 節	19
VI. IOC へのアピール	20
VII. 参考資料	
a. 資料 A- サマランチ IOC 会長からの書簡	21
b. 資料 B-他の障害者スポーツ団体による介入	22
c. 資料 C- 商標使用権の侵害例	30

デフリンピックとは

はじめに

デフリンピックとは、1924年にはじめられた、世界で二番目に古い国際総合スポーツ大会である（オリンピックが一番古く、1896年に開幕した）。デフリンピックは、国際オリンピック委員会（IOC）の保護の下で行われている。2005年1月には、第20回夏季デフリンピックが、オーストラリアのメルボルンを舞台に、過去最大の参加者と国際的な注目・支援を集めて開催された。

この文書は、国際ろう者スポーツ委員会（CISS/ICSD）によって運営されてきた、デフリンピックの歴史、ろう者のスポーツと競技が行われている世界各地の状況、関連データ、組織機構、ろう者スポーツ界の著名な人物、IOC・国際パラリンピック委員会（IPC）および関連諸団体との関係、これまでの重要な出来事や課題、将来向かうべき目標について、明確な全体像を提供することを目的としている。

ろう者スポーツの歴史、競技地域、ICSDの関連データ

ろう者は、歴史に記録が残る以前から、常に仲間を求め、互いに共通するものを見出してきた。とりわけ、手話による、視覚を通したコミュニケーションを続けてきた。最初のろう学校が設立されて以降（パリ 1755年）、ろう者は社交や文化的交流を求めて、公共の場で集まることが増えてきた。ろう者のほとんどは（現在もそうだが）健聴者の両親のもとに生まれている。彼らは長らく、コミュニケーションの困難を味わい続け、わけても、「聾」であるがゆえに、社会の中でやっていく能力が劣ると誤解される経験を重ね、否定的なステレオタイプを押し付けられてきた。「おし、つんぼ (Deaf and dumb)」という古い言葉があるが、これは「口のきけない愚鈍な者」「馬鹿」「能力がない」という意味を含んでいる。世間は常にろう者を知的に劣った、言語の理解が出来ない者とみなし、市民として周縁化した存在として扱ってきた。

教会や読書会など、ろう者によるコミュニティが形成されるにつれ、ろう者によるスポーツのクラブも作られるようになった。ヨーロッパでは、各地のろう者スポーツクラブが、国境を接する地の利を得て、他の国のクラブと友好試合を行うようになった。やがて、フランスろう者スポーツ連盟の会長だったウジェーヌ・ルーベンスーアルケーが、近代オリンピックを模した、ろう者の国際スポーツ大会を構想するようになる。ベルギー人の若きろう者、アントワーヌ・ドレッセが、その実現を側面から支えた。

最初の大会は、1924年にパリで開催された。この「国際サイレント大会 (International Silent Games)」として知られる大会は、障害を持つ人を対象とした、史上初のスポーツ大会だった。この最初のパリ大会を締めくくるにあたり、ろう

者のスポーツ指導者たちは近隣のカフェに集い、ろう者スポーツの国際的統括組織を設立した。

この新しい団体、Le Comité International des Sports Silencieux (the International Committee of Silent Sports - CISS「国際サイレント・スポーツ委員会」)は、のちに Le Comité International des Sports des Sourds (The International Committee of Sports for the Deaf「国際ろう者スポーツ委員会」)と名称を改めた。

1924年の大会は、9カ国から124名の選手が参加し、以後4年に1回、夏季大会が、第二次世界大戦による中断まで開催された。アメリカ合衆国が1935年にICSDに加盟し、初のヨーロッパ圏外の加盟国となった。冬季大会は、1949年に初めてオーストリアで開催され、5カ国から33名の選手が参加した。

1955年、IOCはICSDを、「オリンピックに準ずる国際スポーツ連盟である」と認定した。

デフリンピックは、専らろう者のコミュニティに属する者によって運営されている点において、他のIOCの認可団体と一線を画している。ICSDの会議において投票権を持つ代表者、理事会および執行部の構成員は、ろう者に限られている。

ヨーロッパ圏外で行われた最初の大会は、1965年のワシントンDC大会であった。1981年にドイツのケルンで開催された世界ろう者スポーツ大会（当時はDeaf World Gamesと呼ばれていた）では初めてIOC会長、ファン・アントニオ・サマランチ氏が臨席した。また、ドーピング検査がこの時初めて実施された。

1999年には、CISS/ICSDの設立75周年が祝われ、2001年には、この大会の新たな名称「デフリンピック」が、IOCによって公式に認められた。**(参考資料 A- IOC 会長、ファン・アントニオ・サマランチ会長からの書簡)**

2005年夏季デフリンピックはメルボルンで開催された。南半球で開催された2回目の大会である（1989年にニュージーランドで開催されている）。2005年大会の規模は以下の通りである。

- 74カ国 3,488名の選手・役員が参加
- 21の国際報道団体が取材
- インターネットによる動画配信が行われ、400万人以上が観戦した
- 開会式には、14,000人以上が参加した
- 65名の通訳者が配置された（うち19名は国際手話通訳、35名はオーストラリア手話通訳、10名がリレー通訳）
- 1,783名のボランティアが参加した（うち266名はろう者・難聴者）

選手たちは 15 の競技で技を競い合った。この時実施された競技は、水泳、陸上、テニス、10 ピンボーリング、バスケットボール、バレーボール、ビーチバレー、卓球、ハンドボール、レスリング、サイクリング、サッカー、オリエンテーリング、射撃、そしてバドミントンである。このうち水泳、水球、陸上、射撃、バスケットボールでは、視覚を利用した補助具が使用された。ライトの点滅によって、スタートの合図や審判のホイッスルに代わる役目を果たす。

メルボルン大会の特記すべき事柄としては、デフリンピックのウェブサイトにも、世界各地からアクセスが認められたことである。大会中、500 万以上のアクセスが確認された。さらに、開催地のメルボルンに、1,900 万ドルを超える経済効果が計上されたこともあげられる。

デフリンピックはこれまで、大会招聘を果たした国の、全国レベルのろう者スポーツ団体によって運営されてきた。現地のろう者スポーツ協会は、デフリンピックの組織・運営に専念する企業体(company)、もしくは委員会を設立する。その企業体/委員会は、ICSD によって定められたデフリンピックの水準を維持すべく、財政基盤の確立や、スポンサー探し等の責務を負う。時には、政府も全国レベルのろう者団体と協力し、大会の遂行において重要な役割を果たし、全国・地方単位のスポーツ協会も、大会運営に協力する。健聴者の政府やスポーツ協会の関与にあたり、ろうの役員や選手とのコミュニケーションをするためには、レベルの高い手話通訳の存在は欠くことが出来ない。

大会では、ビデオモニター・字幕・掲示板など、視覚を通しての情報提供は、選手・観客いずれにも、極めて重要なインフラである。視覚環境の整備は、ろうの選手・役員、そしてろうの観客のコミュニケーションを進めるにあたり、決定的な要素である。

第 16 回冬季デフリンピックは 2007 年、米国ユタ州ソルトレイクシティで、20ヶ国 300 名の選手を集めて行われた。2009 年の夏季大会はチャイニーズタイペイ（中華民国）で、2011 年の冬季大会はスロバキアで開催される。

2008 年現在、ICSD には 98 カ国が加盟している。最近加盟を果たしたモンゴル、バングラデシュ、キプロス、エストニア、ウルグアイ、アイスランドなどの国々は、地理的に不利な環境にありつつも、この国際的ネットワークと、社会参加の機会を享受している。国内外のろう者のコミュニティにとって、スポーツは絆を深める機会であり続けている。ろう者スポーツを通して共に集い、文化や言葉の壁を失くす場を作る重要性は、過去最多の選手と役員が集い、ひとつの歴史を築いた 2005 年メルボルン夏季デフリンピックで、十分に示されたと言えよう。

オリンピックをはじめとする国際スポーツ大会同様、ろう者も健聴者も、スポーツ選手とは、記録の更新に向けてたゆまぬ努力を続けるものである。ろう者のスポーツにおいても世界記録は記録され、各競技の標準記録の指針となっている。

いくつかの競技では、世界選手権がデフリンピックに先行して行われる。また、ローンボール、ゴルフ、武道など、デフリンピックでは行われない競技もある。さまざまな種目で、地域ごとの選手権大会（ヨーロッパ、アジア太平洋、アフリカ、南北アメリカなど）が定期的に行われているが、特にチームスポーツで競技国が出場枠を上回る場合、国同士の出場権をかけた戦いが行われる。

補聴器メーカーの **WIDEX** は、ろう者のスポーツマン／スポーツウーマン・オブ・ザ・イヤー表彰のスポンサーとなっている。各国のろう者スポーツ連盟が、その年活躍した選手をノミネートし、ろう者スポーツ、もしくは他の国際スポーツ大会で、特にすぐれた成績を挙げた男女各1名を、**ICSD** 理事会で選出する。また、夏季デフリンピックにおいては、**WIDEX** はフェアプレー賞を選手1名に授与している。

ICSD の構成・組織、およびすぐれたろう者のスポーツ選手について

ICSD の理事会は、ろう者によってのみ運営されるという、きわめて独自の特色がある。会議で選ばれた、投票権を持つ理事6名と、地域代表理事による投票権を持たない4名によって構成される。彼らは世界のさまざまな地域の出身なので、それぞれ異なる手話を使用している。従って、会議では国際手話が用いられる。全加盟国による国際会議は2年に1回、デフリンピックの期間中に開催され、各国から2名の代表が参加する。国によっては資金不足、あるいは財政支援上の限界により、世界大会に代表を送ることが叶わず、地域ブロック大会の参加に限定せざるを得なくなることがある。

全加盟国を招集する **ICSD** の臨時総会は、**ICSD** 会長の決定もしくは、少なくとも、2つ以上の地域にまたがる全加盟国の3分の1の要請によって開催される。理事はすべて、国際手話に習熟していなければならない。役員構成は、会長、副会長、スポーツ監督、広域メンバー3名、そして各地域ブロックの会長もしくは各地域から指名された人物による投票権を持たない理事という内訳となる。

ICSD の目的とは：

- ろう者スポーツの国際代表組織であること
- 国際的なろう者のスポーツ共同体において、トレーニングと競技の機会をすすめること
- ろう者スポーツのトレーニングを開発し、選手が国際基準のスポーツ大会に参加する既存の機会を拡大すること
- 開発途上国における、ろう者スポーツの組織化と開発をすすめること
- 上記の目標の追求のため、国際オリンピック委員会 (**IOC**) と国際スポーツ競技連盟連合 (**GAISF**) と連携すること
- 各国際スポーツ連盟 (**FIFA**, **FIBA** 等) と連携し、ろう者のスポーツ選手およびプログラムの継続した指導と情報を提供すること

いかなる組織においても、その設立・現在進行形の発展においては、軸となる人物の存在がある。ICSDにおいても、多くのろう者が立ち上げと推進の立役者となってきた。たとえば、自転車の選手であり、車の技術者でもあったユージン・ルーベンス・アルケース *Eugene Rubens-Alcais* (フランス) は、ろう者スポーツにおいて、まさに近代オリンピックの父たるクーベルタン男爵のような役割を果たした。彼は 1924 年にパリで開かれたオリンピックを経て、フランスでろう者スポーツ組織を設立し、ろう者の国際スポーツ大会を興したのだった。アントワヌ・ドレッセ *Antoine Dresse* (フランス) は、ICSD 設立以来、1967 年に引退するまでの 43 年間にわたって事務局長を務めた。ヌード・ソンダーガード *Knud Søndergaard* (デンマーク) は 1973 年から 97 年の間事務局長を務め、1971 年から 95 年に ICSD 会長を務めたジェラルド・ジョーダン *Jerald Jordan* (米国) は、1995 年に IOC からオリンピック勲章を受けている。

すぐれたろうのスポーツ指導者のみならず、優秀なろうのスポーツ選手も増えている。ろう者の国際大会で抜きん出た成績を挙げるのみならず、世界トップレベルの大会で、健聴者の選手と戦うのである。こうしたろうの選手たちの多くは、ろう者のスポーツ大会で研鑽を積み、より高い成果を挙げる自信をつかんでいる。

以下はそうした選手の例である

Jeff FLOAT (米国) – 1984 年 ロサンゼルスオリンピック出場 (水泳、金メダル獲得)

Cindy-Lu FITZPATRICK (オーストラリア) – 1982 年 ブリスベンオリンピック、および 1986 年英連邦競技会エディンバラ大会出場 (水泳)

Dean Barton SMITH (オーストラリア) – 1992 年 バルセロナオリンピック、および 1990 年 英連邦競技会オークランド大会、1994 年 同ビクトリア大会出場 (十種競技)

Terrence PARKIN (南アフリカ) – 2000 年 シドニーオリンピック出場 (水泳、銀メダル獲得)

Frank BARTOLILLO (オーストラリア) – 2004 年 アテネオリンピック出場 (フェンシング)

Tony ALLY (英国) -2004 年 アテネオリンピック出場 (飛び込み)

Jueri JAANSON (エストニア) – 2004 年 アテネオリンピック (ボート・シングルスカル、銀メダル獲得)、および 2008 年 北京オリンピック出場 (ボート・ダブルスカル、銀メダリスト)

Hugo PASSOS (ポルトガル) – 2004年 アテネオリンピック出場 (レスリング)

Tamika CATCHINGS (米国) – 2008年 北京オリンピック出場 (バスケットボール、金メダリスト)

Chris COLWILL (米国) – 2008年 北京オリンピック出場 (3m 飛び板飛び込み)

Maria Belen DUTTO (アルゼンチン) – 2008年 北京オリンピック出場 (BMX サイクリング)

Norbert KALUCZA (ハンガリー) – 2008年 北京オリンピック出場 (ボクシング)

Fausto QUINDE (エクアドル) – 2008年 北京オリンピック (50km 競歩)



デフリンピックのロゴマークは、グラフィックデザイナーでもあり、オリンピックにおけるサイクリングの銀メダリストでもある、ろうの選手によって、2003年にデザインされた。国際的なろう者スポーツの共同体にとって、ポジティブで力強いシンボルとなっている。手話・ろう文化・世界の文化・一致と永続性といった、重要な理念をひとつにしたデザインである。

「OK」「よい」「素晴らしい」などの意味を表す手話が、交互に輪のように重なり合うと、「オリンピック」を表す手話となる。2つの手でこの形を作ると「一致」を意味する手話となる。

このロゴマークの中心部分は、目の虹彩を表している。つまり、ろう者とは視覚の人であり、目によってコミュニケーションをする者であると謳っている。

また、このロゴマークは、世界の国旗の4つの色を組み合わせで作られている。この赤・青・黄色・緑色は、世界4つのろう者スポーツ連盟—アジア太平洋ろう者スポーツ協会、ヨーロッパろう者スポーツ機構、南北アメリカろう者スポーツ連盟、アフリカろう者スポーツ委員会—を表している。

IOC、IPC、および他の国際スポーツ団体との関係について

国際オリンピック委員会 (*International Olympic Committee, IOC*)

ICSID の中心となる活動目的のひとつは、加盟要件を満たした団体として、国際オリンピック委員会 (IOC) と国際スポーツ競技連盟連合 (GAISF) と連携していくことである。われわれは、この関係を保持することを誇りに思い、きわめて重要なことととらえている。ICSID と IOC との重要な関係は、定期的な会合によって維持されている。ICSID は 1955 年、オリンピック水準を有する国際競技団体であるとして、IOC の一部として認められた。1966 年、ICSID はスポーツへの貢献が認められ、IOC よりオリンピック杯を授与された。1981 年、IOC 委員長フアン・アントニオ・サマランチ氏がドイツ・ケルンで開催されたデフリンピックに臨席し、1997 年デンマーク・コペンハーゲン大会で再び臨席した。1985 年より、IOC の旗が、ICSID の旗に隣接して掲げられるようになった。

国際パラリンピック委員会 (*International Paralympic Committee, IPC*)

障害者スポーツにおいては、障害者のカテゴリーを大きく3つに分けることが出来る。ろう者、身体障害者、そして知的障害者である。それぞれが、独自の歴史や組織、方法論を持っている。組織スポーツの中には、既存のスポーツに基づきつつ、競技者のニーズに合わせて改訂を加えられた種目もある。さらに言えば、障害を持つ人がプレーするスポーツの多くは改訂がなされず、障害のない人のスポーツの一形態となっている。

ICSID と IPC は、長い間協働してきたにもかかわらず、デフリンピックをパラリンピックに統合するメリットについては、ICSID は疑義を持っていた。1990 年代には、各国ろう者スポーツ協会の一部は、デフリンピックの開催・参加にかかる費用が増大していると感じていた。政府・公的機関からの財政支援を得ることも容易ではない。従って、IPC に加盟することは、諸経費の削減につながり、パラリンピックの知名度の恩恵にも与ることができるという考え方につながった (Stewart & Ammons, 1994)。IOC も、このパートナーシップに対して熱意を示していた。

しかしながら、ろうの選手独自のコミュニケーションの必要性に基づいての、IPC への手話通訳費用の負担、増え続けるろうの参加者の受け入れ困難を鑑みて、ICSD は、IPC からの脱退以外の選択肢はないと判断した。ICSD の会議構成メンバーは、パラリンピックに出場するのであれば、ろうの選手のための競技会の数を減らすことは支持できないとした。IPC も、必要とされる手話通訳の数を鑑みて、相当数の競技会を減らすことが出来ないのであれば、上位団体にはなれないという立場を明らかにした。

ICSD はさらに、国レベルならびに地域レベルのろう者スポーツ組織の、ロール・モデルであり続けてきた（そして、今後もそうなるであろう）。1924 年以来、ICSD はろう者の手によって組織・運営され、自治自律を経験してきた。ICSD と IPC が同等の立場で統合しないのであれば、IPC とのいかなる合意も、ICSD とその競技会がろう者のために運営されるという原則が崩れてしまう。これは、自治組織を掲げるいかなる団体においても、重要な考え方である—外部団体が代わりに運営することとは相容れない。ICSD の根幹となる方針が、ろう者によるリーダーシップである以上、世界中のろう者が力を得て、自治を享受することを可能とし、地方・国レベルのろう者スポーツ組織の手本となることでもある。IOC はこの決断を尊重し、認知と支援を継続した。

2004 年 11 月、ICSD と IPC の役員は、それぞれが役割と責任を有する独立した団体であることを認めた上で、将来、国際競技会における協力体制を作り上げることを念頭に、相互理解覚書（MOU）に署名した。これには、重複する障害を有するろうの選手が、IPC の各種競技会への出場を可能とする、また、聞こえる方の耳で 55 デシベル以上の聴力障害を有する重複障害を持つ選手の、ICSD の大会や世界ろう者選手権への出場資格を認めるなど、踏み込んだ内容も含まれている。この合意書は、各国のオリンピック委員会やパラリンピック委員会が、ICSD の働きを認識し、それぞれ 4 年に 1 度デフリンピック・パラリンピックを開催する、独立した団体であるということの理解をすすめるために作成された。

その他、MOU に含まれる規定には：

- それぞれの団体の自治を相互に認識し、尊重すること
- それぞれの国際スポーツ組織当局への連絡に協力すること
- 関係団体間の紛争の調停に協力すること

その他国際スポーツ連盟

ICSD はこれまで、殊に過去 10 年の間、さまざまな国際スポーツ連盟と協働してきた。ろうの審判やアンパイヤが、さまざまなスポーツ連盟でトレーニングを受けることが出来るよう調整してきた。その結果、デフリンピックや世界選手権、高校や大学の大会も含む各地域の競技会が公式大会となるべく働いている。たと

えば、FILA（国際レスリング連盟）の審判であるろう者の Ron Gough は、FILA のカテゴリーIII の認定を受けている。

2007年、FIBA（国際バスケットボール連盟）の国際認定トレーナーである Oscar Lefwert と Asa Johansson は、10名のろう者に認定審判となるべくセミナーを行った。バスケットボールの認定審判となった参加者の氏名は以下の通りである。ドイツの Jerzy Bednarczuk、Roland Sovarzo、ギリシャの Chara Grammatoglou、Toni Koutsoumaris、イタリアの Fabio Scarpa、スウェーデンの Per Pilstrom、台湾の Hsin-dar Lee、米国の Marsha Wetzel (女性) と Chris Miller、そしてウクライナの Yuri Strelets である。

転機となった出来事と課題

国際的認知と支援

開催地がどこであろうと、大規模なろう者スポーツ大会が、その地域社会における社会と認知に、絶大なインパクトを与えていることについては疑いの余地がない。ろう者の社会人類学者・Hauland は、過去に ICSD の行事に参加した人々を数多く調査し、共通して見られた傾向について次のように記している。「ローマでは、手話で会話をしている人たちが多く見られるようになった。競技を見に来た人たちが次々と到着するにつれ、彼らのしるしは、ローマの街に多く残されていた。路面電車にも、広場にも、通りにも、街のあらゆる場所にろう者がいた。…そして街は、目に見える違いを得ただけではない。ろう者の人口が増えるにつれ、働く人々やウェイターの対応が変わっていったのだ。最初の2、3日は、ろう者の客に対してどのように対応したらいいのか、いささか混乱している様子だったが、何日かすると、多くの人たちは、視覚に訴えてコミュニケーションをする術が、目に見えて向上した」(Breivik, 2002. p. 20)

最近の大会である、2005年メルボルン大会は、デフリンピックに対する国内外のメディアの記録的関心を集めた。そして、インターネットによって動画をダウンロードし、その日のハイライトや結果を見ることが初めて可能となり、会場にいなくても、世界各地から臨場感を味わうことが出来るようになった。

ICSD は今後も、スポーツを行うことが困難である国のろう者が、より多く参加できるよう働きかけ、地域・全国・国際レベルのろう者スポーツのコミュニティに加わることが出来るよう、政府と連携しながら、プログラムを開発するよう呼びかけていきたい。さらに、デフリンピックは、従来のろう学校で学んだろうの子どもたちと、近年増加傾向にある、一般校に通ったろう者のスポーツ選手をつなぐ役割を果たしている。一般校で聴者の子どもと一緒に学ぶ、ろうの子どもが近年増えているのだ。この傾向は過去20年来、米国やカナダで顕著となり、最

近は英国、オーストラリア、ニュージーランド、フランス、ドイツ、他の西ヨーロッパ諸国でも増えている。こうした子どもたちは、一般校の中でろう者スポーツに触れる機会が全くないことが多い。その結果、こうしたろうの生徒たちがろう者スポーツに触れ、優れた選手として成長する機会も失われている。

聴力検査／人工内耳／薬物テスト

ICSD は 1970 年代から、全ての選手が聴力検査を受けることを義務付け、聞こえる方の耳で 55 デシベル以下の聴力損失があることを証明しなければならないとしている。十分な証明が得られない、あるいは選手の聴力に疑義がある場合、ICSD のスタッフによる聴力検査が行われる。過去において、聴力損失があると偽ったり、競技中に補聴器を装着していたことが発覚した選手もいる。これらは ICSD の規程の明らかな侵害であり、そのような行為を行った選手は競技への参加を禁止される。

人工内耳を装着している選手が漸次増加傾向にあるため、その唯一の解決策として、補聴器同様、競技中はヘッドセットを装着することは禁じている。

2004 年 7 月、ICSD は世界アンチ・ドーピング機関(WADA)の加盟団体となり、この問題の解決において、大きな前進を果たした。それまで、国際大会の開催地と ICSD の間の協定の他、公式な反薬物使用の規程が存在していなかったためである。

結び

非障害者によって運営されている他の障害者スポーツ大会とは異なり、ICSD は、ろうの選手のために、ろう者によって運営されている。このことは、ICSD 運動をすすめる、全国・地域、あらゆるレベルのろう者スポーツにおいて、貫かれなければならない目標である。

今日の世界において、ろう者のコミュニティが発展し、生き延びていくためには、スポーツを楽しむのみならず、社会とつながっていくことが重要である。「国際大会の重要性は、世界中の人たちが出会い、友情を築く機会を提供することだ。ろう者は、賞を求めて攻撃的に競うのではなく、友として互いに競い合うことが重要である。いかなる手話を使い、どの国から来ようとも、まず何よりも交流すること。選手でもあるが、私たちはまずろう者なのだから」とアモンズは記している(Stewart, 1991)。この言葉は、オリンピックや世界選手権で活躍し、2005 年のメルボルン・デフリンピック大会で 10 個の金メダルを獲得し、7 つのろう者記録を更新したテレンス・パーキンの言葉によっても裏付けられている。パーキンは、デフリンピック創立の理念を形にするかのように、2001 年のローマ・デ

フリンピックに参加するため、重要な世界大会への参加を見送っている。なぜなら、デフリンピックは「家族と共にいるようだったから」と(Breivik, 2002. p. 29)。

参考文献

Breivik, J., Hauland, H. & Solvang, P. (2002) Rome – A temporary Deaf City: ICSD 2001. Working Paper 2. Stein Rokkan Centre of Social Studies, Bergen University.

Available at: ICSD website www.ciss.org

Lane, H., Hoffmeister, R. & Bahan, B. (1996) A Journey into the Deaf-World. Dawn Sign Press: San Diego.

Stewart, D. (1991) Deaf Sports: the Impact of Sports within the Deaf community. Washington, D.C.: Gallaudet University Press.

Stewart, D., & Ammons, D. (Winter, 1994). Awakenings: The 1993 World Games for the Deaf. *Palaestra*. 10, 26-31.

補足資料

Ammons, Donald. "Unique Identity of the World Games for the Deaf." *Palaestra* 6, no. 2 (Winter/Spring 1990): 40-43.

Fosshaug, Siv. "Deaf Sports: An Empowerment Perspective." *WFD News* (Vol. 17 No. 2): 5-6.

Lovett, John M., Eickman, Jordan. and Giansanti, Terry. *CISS 2001: A Review*. West Yorkshire, United Kingdom: Red Lizard Limited, 2004.

Stewart, David. "Global Dimensions of World Games for the Deaf." *Palaestra* 6, no. 2 (Winter/Spring 1990): 32-35, 43.

Stewart, David. *Deaf Sport: The Impact of Sports within the Deaf Community*. Gallaudet University Press, 1991.

他の障害者スポーツとの問題・その他

これまで積み重ねてきた歴史や、IOC や IPC との良好な関係にもかかわらず、障害者スポーツの指導者や組織への啓発において、今も世界各地で問題が生じている (参考資料 B)。

前提として、IPC の定義する障害者スポーツの選手とは、

http://www.paralympic.org/release/Main_Sections_Menu/Classification/

パラリンピック運動に属する障害者スポーツ選手とは、義足使用者、脳性まひ、視覚障害、脊髄損傷、知的障害、および上述のカテゴリーに属さない障害者(その他)

以下に挙げるのは、これまで ICSD が経験した問題の例である。

1. アフリカ障害者スポーツ連合 (ASCOD) 事務局長 Hossam Eldin Mostafa 博士は、アフリカろう者スポーツ連盟 (CADS) 会長 Peter Kalae 氏に、ASCOD はろう者を含むアフリカ全ての障害者スポーツを統括する唯一の組織であり、アフリカスポーツ高等審議会 (SCSA)、アフリカスポーツ連盟 (UCSA) およびアフリカオリンピック組織委員会 (ANOCA) から認められているとする書簡を送った。
2. フランス・スポーツ省は 2007 年、スポーツ政策の大幅な見直しを経て、フランスろう者スポーツ協会 (FSSF) は独立せず、フランス障害者スポーツ協会 (FFH) の傘下に入るべしとする、一方的な決定を行った。
この決定は、ICSD の外交的介入にも関わらず、FSSF の意思に反して実施された。その結果、FSSF は ICSD の会員ではなくなってしまった。1924 年以来、ICSD の会員であったにも関わらずである。
3. 2007 年末、アラブ首長国連邦パラリンピック組織委員会は、ICSD に対し、ろう者スポーツも含めて全ての障害者スポーツを管轄下に置く と 通 告 した。同 通 知 で は、国 際 パ ラ リ ン ピ ッ ク 委 員 会 に 公 式 な 登 録 を 行 っ て い る 団 体 で あ る こ と を 強 調 し た 上 で、同 団 体 が ア ラ ブ 首 長 国 連 邦 の ろ う 者 ス ポ ー ツ を 代 表 す る 唯 一 の 団 体 で あ る と し た。ICSD はただちに、ICSD がろう者スポーツを統轄する国際団体であるという役割を、再確認する文書を送った。また、その写しを IPC と IOC にも送付している。アラブ首長国連邦パラリンピック委員会からは、返答を得ていない。その結果、2009 年の夏季デフリンピック台北大会には、同国からの選手は出場しない見込みとなった。
4. ボツワナパラリンピック協会 (PASSOBO) は、同団体がボツワナの障害者スポーツの発展をすすめるスポーツ組織であるとして、ICSD

に接触した。同団体は、国内全ての障害者のスポーツ（脊髄損傷、ポリオ、義肢使用者、その他、脳性まひ、精神障害、視覚障害、聴覚障害）関連団体への登録を進めることが行動要綱の一環に含まれているとして、その結果、ICSD への加盟を求めてきた。ICSD 憲章(4.1.2.1)による加盟申請は、その国のろうスポーツの自治組織として認知され、かつ、ろう者の会長と役職の多数をろう者が占めていなければならない。

5. 近年では、英国でろう者のスポーツ選手たちが、2009年9月に開催される、デフリンピック台北大会に参加できるよう運動を始めている。英国政府が、デフリンピック選手団への資金援助を取り下げたためである。Gerry Sutcliffe スポーツ大臣は、2008年2月29日に英国ろうスポーツ協会に、「2008年北京大会・2012年ロンドン大会のオリンピック・パラリンピックのすぐれた選手を支援するプログラムに焦点をあてるため、苦しい決断をしなければならなかった」とする書簡を送った。

各国政府と各国オリンピック委員会

上で述べた問題、そして他の種々の問題は、多くの政府や各国のオリンピック委員会が、障害者スポーツに対して明確な区分がないことが原因で起こっている。さらに言えば、こうした問題は、ICSD・デフリンピックが、IOCファミリーの内部において、別個であり、平等かつ独立した組織であるという明確な認識がないためである。

各国政府および各国オリンピック委員会は、IOCとIPCは、オリンピックおよびパラリンピックを司る国際組織であることを、敬意を持って認識している。ICSDが世界中のろう者スポーツを管轄する国際組織である以上、夏季および冬季デフリンピックを管轄するいかなる国際組織は、現在のところ、他に存在しない。

各国のろう者スポーツ連盟がその国の政府へ支援を求める際、政府関係者やオリンピック委員会の中で、CISS/ICSDがデフリンピックに対して責任を担っているという認識に混乱がある。今もって、各地のろう者スポーツ連盟は、他にそのような団体が存在しないという事実があるにも関わらず、その国のろう者スポーツナショナルチームが、デフリンピックに出場するにあたっての責任を有していることを、政府やオリンピック委員会に説明し続けなければならない。

ここではふたつの方向性がある。ひとつは、政府やオリンピック委員会は、彼らにとって未知の、CISS/ICSDの権威を認めることを拒否しており、上であげた例のように、IPCがろう者スポーツを管轄していると主張する。このような方向性は、多くの国のろう者スポーツ団体に困難を生じさせるのみならず、ICSDにと

っても受け入れがたい。このような状態は、ろう者スポーツの絶滅につながってしまう。

その一方で、デフリンピック委員会が国内で設立され、デフリンピック代表チームの参加への諸業務をすすめるとよいとする、政府やオリンピック委員会も存在する。彼らは、各国ろう者スポーツ協会を、地域・国・国際レベルのろう者スポーツ大会を統括する団体であると認識している。

IOCがデフリンピックの名前を掲げることを制約した場合、政府がろう者スポーツ連盟への対等な認知・敬意を示さない、財政支援を提供しないという問題がしばしば起こってきた。現在、デフリンピックに参加する選手の数が減少するという事態が生じているが、その主な理由は、限定された政府支援である。選手や参加チームの不足で、中止に追い込まれた大会もある。IOC自身による、迅速な注意喚起と行動を行わなければならないという、大きなジレンマが生じている。

2005年以降、夏季あるいは冬季デフリンピックの開催国において、新たなジレンマが発生している。開催地が決定すると、その国の政府の担当者は、ろう者スポーツ連盟ではなく、その国のデフリンピック委員会とやりとりをする事になっている。2005年のオーストラリア大会開催の際には、オーストラリアオリンピック委員会から、一切の支援は行わないと示唆された。これは、オーストラリア国内でデフリンピックの名前を掲げることを許可するという、IOCのキーヴァン・ゴスパーによる介入行為によるものだった。

2003年、ICSIDの正会員であるスロバキアろう者スポーツ協会（SADS）は、2011年冬季デフリンピック開催の榮譽に浴した。これにおいて、スロバキア政府は、スロバキア・デフリンピック委員会と共に、開催の準備をするものを目指していた。しかし、IOCの許可が得られなかった結果、スロバキアにはデフリンピック委員会が存在しないことを知るや、政府は大いに当惑した。スロバキア政府は、スロバキア・デフリンピック委員会が設立されるか、スロバキア・パラリンピック委員会（SPC）が2011年の冬季デフリンピックを監督するよう依頼をするか、いずれかを決断するよう、最後通牒をつきつけた。SPCがデフリンピックを統括するのは、スロバキアろう者スポーツ協会・ICSIDの両者にとって、全く受け入れがたいことだった。長い議論の結果、スロバキア政府とスロバキア・オリンピック委員会は、2011年の冬季デフリンピックを監督するため、スロバキア・デフリンピック委員会を設立する旨、委任状を発行した。

デフリンピック選手団の参加にあたって、継続した財政支援を得るには、政府や各国オリンピック委員会からの支援を受ける、デフリンピック委員会設立の委任を受けている国が、5・6ヶ国は必要である。その一方、デフリンピック委員会のない国は、ろう者スポーツ協会の存続も極めて難しい。

自己決定のシンボルとして、国際デフリンピックの管理・監督を行うことは、CISS/ICSDの重要な任務であった。既に述べたように、その責務をろう者に委嘱する国もある。ろう者スポーツ連盟が疎外され、国内パラリンピック委員会の管轄となることは、ろう者スポーツの死につながる。「デフリンピック委員会」の名を冠している国では、同等の支援を受け、デフリンピックへの完全参加を果たし、ろうの選手に対し、適した訓練と監督を提供している。国内パラリンピック委員会がろう者スポーツを傘下に置こうとしている国では、練習やユニフォーム、国内外の大会旅費、そして、デフリンピック参加への資金は限定されている。

CISS/ICSDは、国や政府がデフリンピックの名を使うことに対し、制限する権限は有していない。グッド・ガバナンスについてのIOCの基本汎用原則や、2006年6月にロジェ会長によってなされた「CISS/ICSDは各国の問題に介入するべきではない」とする助言に従うのであれば、介入行為を行うことは適切ではない。

デフリンピックのトレードマーク

デフリンピックのトレードマークが今後広がっていく可能性を鑑みて、その商標の保護は重要である。団体や個人が自身の利益のために使用すること、ICSDに損害を与えることを防ぐことが出来るためだ。ICSDはIOCの援助を受け、トレードマークの保護に積極的に取り組んでいる。これまでもICSDは、認可を受けていない人々が、自分のウェブサイトやメールアドレスにこのトレードマークを使用し、ICSDやデフリンピックを代表するかのように見せようとするケースを、何度か経験してきた。そのようなサイトの運営者に、デフリンピックの名前を使用する権利を購入するよう交渉したケースが1件あるが、多くは権利を購入することを拒否し、その後も継続して使用し続けた。そうしたサイトやメールアドレスの中には、オリンピックの理想を正しく伝えていないばかりか、むしろ損なう結果を招くこともある。ICSDはそのようなサイトを管理下に置くことは出来ないため、今は早くこの問題が解決することを願うのみである。(資料C)

ICSDは、デフリンピックの名前を維持し、保護していく重要性を強調していきたい。

IOCの使命と役割

IOCの使命は、**オリンピズム**を世界に推進し、オリンピック・ムーブメント（オリンピック運動）を導くことである。

IOCの役割とは：

1. スポーツにおける倫理の振興およびスポーツを通じた青少年の教育を奨励、支援するとともに、スポーツにおいてフェアプレーの精神が隅々まで広まり、暴力が閉め出されるべく努力すること。
2. スポーツおよび競技大会の組織、発展、調整を奨励、支援すること。
3. オリンピック競技大会が定期的開催されることを保障すること。
4. スポーツを人類に役立て、それにより平和を推進するために、公私の関係団体、当局と協力すること。
5. **団結を強めオリンピック・ムーブメントの独立を守るために行動すること。**
6. **オリンピック・ムーブメントに影響を及ぼすいかなる形の差別にも反対すること。**
7. 男女平等の原則を実行するための観点から、あらゆるレベルと組織においてスポーツにおける女性の地位向上を奨励、支援すること。
8. スポーツにおけるドーピングに対する戦いを主導すること。
9. 選手の健康を守る施策を奨励、支援すること。
10. スポーツや選手を、政治的あるいは商業的に悪用することに反対すること。
11. 選手の社会的かつ職業的な将来を保障するためのスポーツ組織および公的機関の努力を奨励し、支援すること。
12. **「スポーツ・フォア・オール」の発展を奨励、支援すること。**
13. 環境問題に関心を持ち、啓発・実践を通してその責任を果たすとともに、スポーツ界において、特にオリンピック競技大会開催について持続可能な開発を促進すること。
14. オリンピック競技会のよい遺産を、開催国と開催都市に残すことを推進すること。
15. スポーツを文化や教育と融合させる試みを奨励、支援する。
16. 国際オリンピックアカデミー(IOA)の活動、およびオリンピック教育に献身するその他の団体の活動を奨励、支援すること。

(訳注：日本オリンピック委員会訳「オリンピック憲章」(2007年)より引用、用語の一部を改訳。なお、太字による強調は筆者によるもの。)

IOCのマーケティング活動

IOCは、オリンピックのマーケティングによる収入を、国際パラリンピック委員会、パラリンピック組織委員会、世界アンチ・ドーピング機構(WADA)など、さまざまな国際スポーツ団体のプログラムに提供している。

オリンピックとスポーツ運動の自治についての第2回セミナーIOC決議

1. この第2回セミナーが、オリンピックおよびスポーツ運動全体におよぼした、幅広くかつ深い貢献を歓迎し、この課題に対する強い関心の維持および、献身と団結を重視することを示す。

2. オリンピックとスポーツ運動の自治は、スポーツの振興とその理念の推進、全ての選手の利益のために欠くべからざるものであることを再確認する。
3. **オリンピック・スポーツ運動の意図を表すために、相互尊重の枠組みの中で政府や国際団体と協働し、スポーツとそこから得る利益を世界全ての人々の手に至らしめること。**
4. **過去18ヶ月の間、オリンピック運動のすべての参加者による目覚ましい貢献によって、スポーツの自治の概念が成長したことを評価する。一方で、この原則が必ずしも受け入れられていないことを示す、深刻な介入行為を含む特定の問題が存在していることも認識している。**
5. **オリンピックとスポーツ団体を保障する基本原則としての、グッド・ガバナンスを強調し、この自治が関係者によって尊重されるべきことを確認する。**
6. 本セミナーにおいて提出された、「オリンピックおよびスポーツ運動における、グッド・ガバナンスの基本汎用原則」と題した草稿に原則的支持を示し、かつ、その際に提示された推薦および修正事項を、2009年に開催されるオリンピック会議までに反映させる。
7. われわれの自治を維持する職務を担う「オリンピックとスポーツ・ネットワーク」を即時形成し、それによって、今後の必要な決定や行動の礎となる情報の交換を促進し、国際的視野に基づく分析を提供する基盤となる。

国際連合条約

国連障害者の権利条約第 30 条 5 節

国際連合（UN）における 5 年間の折衝を経て、障害を持つ人たちの権利を向上させ、保護する新たな条約が、192 ヶ国全ての加盟国代表の賛成を得た。

この時初めて、障害のある人がスポーツ活動に参加するにあたり、一般のスポーツもしくは障害者のためのスポーツか、選択肢を行使して参加出来ること、学校教育の中でスポーツへの平等の機会があること、参加・観戦のいずれの場合においても、スポーツやレクリエーションの場へのアクセスがあることなどが認知された。現在、世界で 6 億 5 千万人の人々が、障害と共に生きていると言われている。

ろう者や難聴者にとって、第 30 条 5 節の適用は非常に重要な意味を持っている。国際ろう者スポーツ委員会(ICSD)の理念、“Per Ludos Aequalitias (Equality through sport、スポーツを通じた平等)”の持つ意味の理解に、ようやく至ったからだ。

この歴史的、かつ法的拘束力を持った突破口のインパクトは、ろうや難聴のスポーツ選手の能力を拓き、平等な競技の場で競い合う権利を守ることになるだろう。

ICSD は、競技スポーツの国際機構に対し、情報を提供し、国レベルでの連携組織において発生しうる不平等と溝について周知を行うことにおいて、国際オリンピック委員会（IOC）、および国際パラリンピック委員会（IPC）と協働していく。

権利条約第 30 条 5 節の適用は、障害を持つ選手たちが、国際的な舞台で、そのスポーツマン精神とデフリンピックへ参加する熱意を発揮することを保障するものである。より多くの、より力ある選手たちが、障害種別競技会の最高峰へとアクセスし、よりよい軌跡を残すことが出来るのである。

さらに言えば、わけても、この第 30 条 5 節の適用は、デフリンピックで競うことを希望する、ろうおよび難聴の選手たちに、より一層の敬意と認識を保障するものである。われわれは、ろうおよび難聴の選手たちが、他の障害を持つ人たちと同じように、敬意と尊厳をもって扱われるために、各国政府や非政府組織、国際および各国スポーツ団体と共に働き、その課題に向き合うことを歓迎する。

IOC へのアピール：

夏季および冬季デフリンピックを管轄する国際組織である、国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）は、四年に一度開催されるオリンピックに対し、敬意を払い、競合者として努力し、デフリンピックも近年のオリンピック同様、プロフェッショナルな方法で運営したいと熱望している。われわれは、オリンピックの理想を掲げ、オリンピズムの精神がこの組織に強く流れていることに誇りを持つものである。

われわれは、夏季および冬季デフリンピックが、国内外でより広く存在と認知を得られるよう、努力を傾けている。優秀なろうのスポーツ選手が、男女を問わず、その力を発揮する世界の舞台を整え、オリンピックというより高い舞台へと進んでいけるよう働いている。われわれは、デフリンピックおよびオリンピックで競うろうの選手の功績に、誇りを持って、敬意と賞賛を送るものである。

しかしながら、過去 3 年にわたる出来事について、IOC レベルの場において交わされてきた議論や、上述のさまざまな団体や連盟との課題を鑑みると、こうした問題を解決するためには、IOC の支援が必要である。ろう者のためのスポーツを運営するにあたり、国レベルのスポーツ連盟による介入、圧力、威圧行為に直面している現状がある。こうしたことは受け入れがたい。

国際的なスポーツ連盟、各国オリンピック委員会および政府においては、ICSD の存在を認識し、その自治と独立と同格性を尊重することが急務である。ICSD と IOC との間で交わされた MOU が、十分に伝達され、尊重されているとは明らかに思われない現状がある。2006 年 7 月に開催された会議において、ロジェ委

員長に依頼したとおり、また、IOCのスポーツ部門および司法部門との複数の会議においてもなされたように、この違いを加盟各国に明確に理解してもらうことにおいて、IOCの支援が必要である。この認識がなければ、ろう者のスポーツ運動は根絶やしの危機に瀕してしまう。

「IOCの使命」においては第5項（団結）・第6項（差別の禁止）・第12項（すべての人のためのスポーツ）が、「オリンピックとスポーツ運動の自治に対するIOC決議」においては第3項（相互尊重）・第4項（自治／深刻な介入行為）・第5項（自治）の各項目は、IOCの掲げる理念の中でもきわめて重要である。ICSIDもまた、これらの理念を重要なものとして掲げ、われわれの代理として、IOCに仲裁に入ることを要請したい。

われわれは、IOCが寛容をもってわれわれを信頼し、われわれがIOCファミリーの存立可能な一員であり続けるための資源であり続けることを求める。われわれがIOCを、全力をもって支援するように、同様の支援をお願いしたい。われわれの組織が存立可能であるために、オリンピック博物館やIOCの広報誌にわれわれを含めることや、IOCの代表が夏季および冬季デフリンピックに参列することについて、話し合いの場を設えたことを感謝している。しかし現在のところ、まだ多くの課題をわれわれは抱えており、危急の支援を必要としている。

ご静聴感謝します。

資料 A : サマランチ IOC 会長からの書簡- 2001 年 5 月- Deaflympics

(国際オリンピック委員会会長便箋)

ジョン・M・ルヴェット殿
会長
国際ろう者スポーツ連盟
184 Thayer Ave. Suite #350
US- Silver Spring, MD 20910 USA

ローザンヌ 2001 年 5 月 17 日
文書番号 10342/2001/GMF/cma

Re: 名称の変更

ルヴェット殿

2001 年 3 月 9 日付の書簡を拝復いたしました。内容は然るべく確認いたしました。

2001 年 5 月 16 日、ローザンヌにて開催された IOC 理事会において、ICSS の主要大会の名称が「デフ・ワールド・ゲームス」から「デフリンピック」へ変更されることが承認されたことを、喜びをもって報告いたします。

敬具

(署名)
ファン・アントニオ・サマランチ
サマランチ公爵

資料 B：他の障害者スポーツ団体による介入

1. アフリカ障害者スポーツ連合 (ASCOD)

2006年2月2日

IPC 会長 フィル・クレイヴァン殿
IOC オリンピック監督 ギルバート・フェッリ殿
IOC スポーツ監督 ケリー・フェアウェザー殿

ICSID 会長 ドナルダ・アモンズ

RE: アフリカ障害者スポーツ連合による
アフリカ大陸のろう者スポーツへの介入について

アフリカ障害者スポーツ連合事務局長、Hossam Eldin Mostafa
博士より、アフリカろう者スポーツ連合会長、Peter Kalae
氏へ送られた書簡をお送りいたします。不快な手紙と言わざるを得ません。

Mostafa 博士は書簡の中で、アフリカ障害者スポーツ連合(ASCOD)は、アフリカ大陸における、ろう者を**含む**全ての障害者のスポーツに責任を持つ**唯一**の組織であり、アフリカ最高スポーツ会議(SCSA)、アフリカスポーツ連合連盟(UCSA)、およびアフリカオリンピック委員会連合(ANOCA)に認められていると主張しています。

ASCOD は明らかに、IPC と共に 2004 年 11 月 30 日に署名をした相互理解覚書および、2002 年にすべての国のオリンピック委員会に送られている、IOC 覚書のことを考慮に入れていません。IOC 覚書では、ICSID とパラリンピックは、それぞれの 4 年に 1 回の競技会を開催する、2 つの別個の、互いに尊重しあう組織であることを、各国オリンピックおよびパラリンピック委員会に対し周知させるための文書でした。

さらに、相互理解覚書は次の規定を含んでいます。1) パラリンピックとろう者スポーツ・ICSID の自治を、相互に認識し、尊重すること 2) 両国際スポーツ監督組織が協力し、情報を提供すること 3) 系列団体間の紛争に対する助言において協力すること

この深刻な事態に対し、IPC および IOC からの回答を、敬意をもって求めます。

IPCからの返信

国際ろう者スポーツ委員会

ドナルダ・K・アモンズ

会長

528 Trail Avenue

Frederick, Maryland 21701

米国

電子メールによる返信・宛先：ammons@ciss.org ammons@Deaflympics.com

ドイツ・ボン 2006年5月30日 UH/IPC

アフリカ障害者スポーツ連合 (ASCOD)

アモンズ殿

アフリカ障害者スポーツ連合 (ASCOC) および、同連合によるアフリカのろう者スポーツへの介入に関する、2006年4月9日付、IPC会長 フィリップ・クレイヴアン卿宛の、貴殿からの書簡にお答えするにあたり、IPCは既に相互理解覚書 (MOU) に従ってきたことを強調します。その内容は以下の通りです。

1. ICSO (国際ろう者スポーツ委員会) が、ろう者スポーツを監督する自治組織であることを認知すること
2. 要請に応じて、われわれの傘下にあるスポーツ監督団体に対し、必要な情報を提供し、誤解があれば正すこと。特に、ろう者のためのスポーツはわれわれの監督下に置かれるものではないことを周知徹底させること
3. 要請に応じて、系列団体間の紛争に対する助言において協力すること

特に本件に関しては、他の全ての団体同様、ASCODに向けて、IPCに対するICSOの役割について告知しています。しかしながら、先の書簡にてお知らせしたとおり、ASCODはアフリカの地域会員団体として、独立した団体であることを認められています。

アフリカのろう者スポーツに対する監督責任を主張するにあたって、ASCODは、IPCとの関係を持ち出すことはしていません。さらに言えば、ASCODはPeter Kalae氏にあてた書簡の中でも、IPCとの関係について触れていません。

われわれは、この件はまず第一に、ICSOとASCODとの間で解決すべき問題と考えています。IPCは今後も引き続き、IPCのすべての関係団体は、ろう者スポーツに対するいかなる権利を有していない旨を勧告し、要請に応じて明示していきます。

敬具

Xavier Gonzalez
上級幹部役員
国際パラリンピック委員会

2. フランス障害者スポーツ協会 (FFH)

2007年5月2日

ジェラルール・マッソン殿
フランス障害者スポーツ協会
42, rue Louis Lumiere
75020 Paris
フランス
Eメール: g.masson@handisport.org

マッソン殿

夏季および冬季デフリンピックを統轄する、国際ろう者スポーツ委員会の会長として、貴殿に書簡を差し上げることは大きな喜びです。今回書簡を差し上げましたのは、フランスのろう者スポーツが急遽、フランス障害者スポーツ協会 (FFH) の傘下に入るという件についてです。FFHは今週土曜日、5月5日に、特別な集まりを持ったと伺っております。このことは、フランスのろう者スポーツの歴史において、重要な出来事であると確信しております。

本題に入る前に、オリンピックと ICSD に直接関わってきた、ある 2 人の重要な人物の言葉を引用させていただきます。

「わたしは、海のように波打つ手と手によって、ひとつになった選手・役員・観客が共有している友情に、非常に感銘を受けました…まさにオリンピックと同じように、すべての関係者にとって、この競技会には特別な意味と目的があるということがすぐに分かりました」 **フアン・アントニオ・サマランチ IOC 前会長**

「ろう者スポーツを他の障害者スポーツから分かつものは何でしょうか。ろうであるということは、障害の一種であるという考え方は、非ろう者の世界において共通して見られる誤解です…ろうであるということは、健聴者の社会において、コミュニケーション上の障害があるということです…ろうのスポーツ選手にとって、ろうではない障害者スポーツの選手は、まず第一に聴こえる人であり、障害者であることはその次であるとみなしています。パラリンピック等の行事に集う聴こえる選手たちは、身体的制約に関わらず、共通の言葉がある限り、自由に語り合うことが出来ます。しかしながら、ろうの選手は、いつもそのような輪

から疎外されてしまうのです」 ジェラルド・M・ジョーダン 国際ろう者スポーツ委員会前会長

1924年にパリで設立された、フランスろう者スポーツ連盟（FSSF）は、世界各地のろう者スポーツを指揮する組織でした。われわれが4年に1度開催するデフリンピックは、同年にパリでその幕を開け、以来喜びをもってこの行事を続けてきました。このことは、われわれが世界で最も古い障害者スポーツの団体であり、1955年以来、国際オリンピック委員会からも認知されています。1966年には、オリンピックの理想の遵守と国際スポーツ界への奉仕によって、IOCよりクーベルタン杯を授与されるという、大きな榮譽に浴しています。

われわれろう者は、われわれのスポーツ団体における自己決定と全き統轄の権利を維持します。この権利は、あらゆるレベルにおける財政支援者の意向によっても、妥協や縮小に至ることはありません。あらためて確認しますが、このことは、他団体からの援助を拒絶するというものではありません—ろう者が自分たちのやり方で物事を運営することを肯定し、許容するものであるのならば歓迎するものです。

ICSIDの規約に従って、FFHの傘下にあるフランスろう者スポーツ委員会が、ICSIDの正会員として自らを代表せしめることを求めます。同規約においては、ろう者のみが、ICSIDの大会、他のいかなる会議における代表者として認められます。

今回のフランスのスポーツ機構の新編成構想を受け、わたくしは、すべてのスポーツ連盟が、それぞれ提供するプログラムやサービス、また機会に対し、最小限の制約条件の下で、完全なる監督責任を有することを認知すべきことを主張します。ろうのスポーツ選手は、聴者の選手と同じように、平等かつ公正にスポーツに参加することが出来るはずで

真のオリンピックの理想の精神を維持するため、手を携えて行きましょう。

敬具



ドナルダ・アモンズ博士
会長

3. アラブ首長国連邦(UAE)パラリンピック委員会

(アラブ首長国連邦パラリンピック委員会便箋)

2007年12月25日

文書番号 395

ドナルダ・アモンズ殿
会長
国際ろう者スポーツ委員会

会長殿

標題「アラブ首長国連邦パラリンピック委員会に関する現在の情報」

アラブ首長国連邦パラリンピック委員会は、すべての障害者のためのスポーツを監督する公的団体であることを、ここにお知らせいたします。

連絡先は以下の通りです。

電話：00971 65561222

FAX：00971 5 5561212

私書箱：38483 Sharjah. UAE

Eメール：uaedsf@emirates.net.ae

ホームページ：UAEparalympic.com

委員長 Sheikh Mohammad Bin Saqr Al Qasimi

Mohammad Juma Bin Hindi 事務局長

Abdul Razzaq Al rashidi 財政主任

Marwan Abdul Majeed Ibrahim 博士 技術主任

従って、ろう者スポーツに関する活動、各種行事への招待、ルールの変更、その他いかなる内容に関しても、上記の連絡先までご連絡いただけるよう、お願い申し上げます。

アラブ首長国連邦パラリンピック委員会は、国際パラリンピック委員会に正式な登録を行っている団体であり、他の障害分野のみならず、アラブ首長国連邦のろう者スポーツに関する**唯一**の代表であることを、お覚えいただけますよう、お願い申し上げます。

より詳しい情報を必要とされる際には、どうぞ遠慮なくご連絡ください。

(署名)
Sheikh Mohammad Bin Saqr Al Qasimi
委員長
アラブ首長国連邦パラリンピック委員会

4. ボツワナパラリンピック協会

PARALYMPIC ASSOCIATION OF BOTSWANA

P.O.BOX 3369
GABORONE
ボツワナ
(南部アフリカ)

(PASSOBO)

電話 (+00267) 3901305
Fax: (+00267) 3901352
Eメール: passobo@bnsc.co.bw

2007年2月17日

事務局
国際ろう者スポーツ連盟

関係各位

Re: 会員登録の申し込みについて

ボツワナパラリンピック協会 (PASSOBO) は、ボツワナの障害を持つ人々のスポーツや余暇活動の発展を推進する責務を持ったスポーツ団体です。

PASSOBO の活動は、1978年にユネスコによって採択された、体育とスポーツに関する国際憲章を基盤としています。すべての障害を持つ人たちのためのスポーツ活動や競技会の整備は、PASSOBO の根幹をなす役割です。その水準を満たすためには、すべての障害（脊髄損傷、ポリオ、義肢等装用者、脳性まひ、精神障害、視覚および聴覚障害、ろう）をもつ人たちのためのスポーツを推進する各種団体への会員登録を必要としています。

障害者スポーツは、非政府組織のみならずあらゆる関係者、特に障害者問題の前線にあらる人たち、専門家、政府機関の協力が必要です。だからこそ、PASSOBO が国際ろう者スポーツ委員会の会員となることが急務の課題なのです。

スポーツは、障害を持つ選手にとって、訓練でもあり治療でもあると共に、社会の中に混ざり合い、コミュニケーションの壁を破る機会でもあります。

従って、ボツワナパラリンピック協会が、貴団体との将来的なパートナーとなり、会員登録を受け付けてくださることを、敬意をもって求めます。

障害者スポーツへの支援に感謝します。

敬具

K. Motlamme
副会長 (スポーツ開発部門)

5. 英国スポーツ (UK スポーツ)

プレス・リリース—
2008年6月9日



「ろうのスポーツ選手の夢は潰えるのか？」

英国のろうのスポーツ選手は、2009年9月に開催されるデフリンピック台北大会への出場に向けて戦っている。その主な理由は、英国政府が、英国デフリンピック選手団に対する財政支援を取り下げたからだ。

英国のオリンピック、およびパラリンピック協会は、英国スポーツから毎年財政支援を得ているが、英国デフリンピック選手団の選手やボランティアは、自分で支援先を探さなければならない。パラリンピックには、ろうの選手団や選手は出場しないので、デフリンピックの選手はパラリンピックには参加できない。

ろう者スポーツは、英国の一部である

1924年に創設されたデフリンピックは、世界で2番目に古い総合種目競技大会・文化事業であり、世界で最も早い成長を遂げているスポーツ大会のひとつである。前回、オーストラリアのメルボルンで開催された第20回デフリンピック(2005年)では、67カ国から3,200人を超える選手と役員が参加した。

英国デフリンピック選手団は、夏季デフリンピックにおける過去最高の成績を挙げる貢献をしてきた。100人強の構成員を擁した英国デフリンピック選手団は、8つの競技に80名の選手を送り込み、16のメダル—金メダル5個、銀メダル5個、銅メダル6個—を獲得した。この結果は、メダル獲得数10位となり、開催国であるオーストラリアを含む、他のより規模の大きい選手団よりも高い成績を残している。この傑出した成果は、前スポーツ大臣リチャード・カボーン氏も認めるところである。

スポーツ大臣ゲリー・サトクリフ氏は、2008年2月29日の書簡で「2008年北京大会・2012年ロンドン大会のオリンピック・パラリンピックのすぐれた選手を支援するプログラムに焦点をあてるため、苦しい決断をしなければならなかった」とする書簡を送った。

ろうの選手に平等はあるのか？

長きにわたって、政府は「平等」を英国全体に推進・推奨してきたが、ろうの選手に対して、4年に1度のデフリンピックに備える年次財政支援に対しては、その耳を傾けなかったようだ。2005年のメルボルン・デフリンピックにおけるメダル獲得に対し、ひとりの選手にかかる政府公庫費用は1,400ポンドであり、一方、2004年のアテネ・オリンピックのメダルひとつに対し、160万ポンドの政府資金がかかっていることと際立った対照を見せている。デフリンピックでメダルを獲得することは、英国オリンピック選手団にかかる費用のわずかな一部にすぎないのだ。

ろうの選手の夢は終わるのか？

ろうの選手たちが流してきた汗と血、そして彼らの抱いてきた夢は水泡に帰すのか。あと2、3ヶ月の間に政府からの援助が得られなければ、英国デフリンピックチームは、台北でのデフリンピック出場を辞退することを検討しなければならないのか。政府からの支援の欠如は、ろうの選手やろうのコミュニティーに、否定的な心理・感情を引き起こすだろう。

「英国デフリンピックチームは非常に差し迫った状況にあり、英国ろうスポーツ協会は何とか選手のために財政支援を得ようと奔走しています。大会参加の夢が断たれてしまうことを恐れています」と、英国デフリンピック組織委員会委員長の、フィリップ・ジェラルドは語っている。

資料 C : 商標使用の侵害例

カブスカウト・オリンピックのワッペン：
ボーイスカウトの子どもやリーダーたちが
団/隊/連盟単位で参加し、記念にもらう
(このワッペンは、同連盟の「探検オリ
ンピック」でも、一時期使われていた)



出典元：<http://www.mninter.net/~blkeagle/cubpack1.htm>



出典元：www.arkansaspoliceolympics.org

SUMMER OLYMPICS 2007

TEAM MILWAUKEE



TEAMS WILL COMPETE IN THE FOLLOWING CATEGORIES

- Unscheduled Call-offs
- OLC Completion
- TIPS
- Jeopardy
- ADASP Training Completed
- Baggage IED Training Completed
- IED Checkpoint Drills
- Volunteerism
- June & July Pot Luck Competitions